

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025.10



令和7年10月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第10号 No.809

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 一〇月号 (通巻八〇九号)

◇今月の二十首詠……オルフォン川 牧 雄彦 2

■作品A 坂上直美・坂出裕子他 4

A 坂本佐和子他 18

C 柴田紀子他 48

B 鈴木睦代他 58

A 山崎三千代他 70

■オリープ集 中西淳子・根岸 亮他 36

◇今月の二人 林 敬子・加藤はるみ 14

●追悼・佐久間 晨 佐久間すゑ子・選 28

追悼文 佐久間作品三十首 佐久間すゑ子・上林節江 八乙女由朗・菊地栄子

佐藤光正・紺野紘史・根本 亮

尾形悦子・安部 律・村上康子

■〈第一歌集を読む〉31 42

三浦好博歌集『水の辺のうた』 上林節江

―鋼のように、綿毛のように―

小野茂樹の言葉を拾う (3)

私と短歌との出会い (278)

■遊覧寄港〈プライベート紀行〉 白子友侑子 17

■歌壇月旦 西畑睦子 46

公開講座『羊雲離散』 西堤啓子 47

■八月号作品批評 62

A……藤田美智子・本元由美子

福光敬子・鈴木文子

B……中山真弓・藤田しん子

C……磯田ひさ子

オリープ集……柴田登志恵

十首選 大久保麗子・和田健二 81

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より (編集部) 82

地中海叢書案内 83

クリップ……表3 84

神田通信……表3 (表紙デザイン) Tazuko Kuga

オルフオン川

牧 雄彦

オルフオンとふ美しき名の川ありて枯木に鳥の黒き巢が見ゆ
見のかぎり枯草色の草原のやさしき起伏は地平線まで

草原を蛇行する川オルフオンの岸辺に緑の萌え始めるき

寄り道の多きひと生^よかモンゴルの草原に立ち来し方おもふ

高空をゆるりと舞ふはイヌワシぞ何を獲らむと地の上ねらふ

どこまでも起伏の続く草原を縫ひたる川の視界より消ゆ

イタチかと思へばあれはタルバガン穴より出でて立ち上がりたり

タルバガン二本の足でついと立ちしばし動かずわれを見つめき

一九三七年生まれ

大阪支社

歌集に「誰もぬ部屋」「地の砂」、

歌文集に「メコン砂々」がある

五月の雪激しく降りてチャーター機飛ばずといはれ宿に戻りぬ

雪やみてひと日過ぐればけふはまた初夏の陽氣に変はりたるなり

滑走路なき草原に着陸し砂を巻き上げ小型機は停止す

ゲルといふテントが今宵の宿ならしストーブ囲みてベッドが四つ

漆黒の闇が草原を覆ひたり見あぐる空に隙間なく 星

静寂の底に寝ころび満天の星にたましひを奪はれるたり

髪の毛座とふ星座を初めて見るものか天頂に小さき星々光る

地平線より地平線まで埋めたる満天の星にことばあらず

全天の星を見上ぐるわれはこの宇宙に生くるいのちひと粒

草原にぼつと立つゲルの屋根ゆ夕餉の支度か煙上がれり

広き広きこの草原のゲルに生れひと生を過ぐし逝きし人はも

冬と春、夏を過ぐしし八日間暑き日差しに送られて発つ

作品 A

坂上直美

夏越祓・七夕

・天

梅雨すでに明けたりという朝早く菅天神の茅の輪を旨指す
半年の厄落とさんとバス停の二つ先なる神社へ向かう
幾人かすでに人あり茅の輪まえ少し下がりにて順番を待つ
守れかし菅天神よ亡き夫よ愚かなるまま年経る我を
茅の輪くぐり水無月を食へ京人の責務を少し果たす心地す
七夕の今宵まれなる晴れなればわが彦星よ川渡れかし
いつの日か銀河を渡り星めぐりただ一人なる君よ会わなん

坂出裕子

小雀

・洛

酷熱の熱暑の夏を涼し気に庭隅に咲く ぐちなしの花
もうすぐに秋が来るよとささやいて白うつくしきぐちなしの花
炎熱の熱暑の昼を涼し気に飛行機雲の白く伸びゆく
朝けより鳴く蟬のこゑ短かからいのちいつばい生きむとはして
桃色の花うつしく求め来し日々草に日毎やすらぐ
窓近く植ゑたる花におはやうと声かけ今日のひと日はじまる
いつまでも暑くはないよとささやいて窓辺に歩みくるる小雀

篠原まり子

猛暑

・羊

古古とテレビの声は紛らわし死んだ小鳥の名を呼ぶごとし
残された一羽の小鳥淋しげに夕への窓に長く留まる
訪ね来る民生委員と会話する独居老人と定まりし身か
母の顔覚ゆる間も無く保育所に預けられたるひ孫大泣き
降りきらぬままの梅雨明け炎天の六月の尽三十七度
猛暑ゆえ何処へも行けぬ日々なればテレビ番組選ぶ気軽さ
ベランダの鉢植えなべて室内に所狭しと共に過ごしぬ

柴田登志恵

虚像

・天

京都行き観光特急に乗り合はせ遠つ国の人に席譲られし
流行の和風電車はなじみなく遠つ国の人にもにせものめきぬ
和風モダンの車両に興りさうもなし「阪急電車 十五分の奇跡」
地下に入り電車の窓に映り込むわれの虚像が転写されゆく
鳥丸と四条の角は神さぶる洋風建築 銀行なりし
遠つ国の言葉さざめく鳥丸の通りに地霊黙したるまま
古生代に滅びしといふが日曜の鳥丸通りをそぞろ歩きぬ

鈴木結志

うたと筆

・福

「勤勉は幸福の母である」スペインのセルバンテスの言葉に納得可愛さと理智的陰影重ね持つ如意輪観音の頰杖姿に心ひかる言もちて実る表現うたに詠み永らう生きの礎となさん
襲われたら内臓を放出して逃げるナマコの身の守り方サカナ君の研究書きしるすうたに落丁などあらじ老いの意気地のふでひたにとる意志強く幾春かけて来し筆やわれより先に丸みおびきぬ
自由という老いの意気地を詩に結び時を余さずみじかうた詠む

関根榮子

夕立

・埴

雨上がり道のすっきりひらけたり見果てぬ夢をわれはまたもつさり気なく席ゆずりくれし青年の車窓を流れゆく青稲田積乱雲盛り上がり見ゆこの頃は夕立ではなくゲリラ雷雨と夕立のあとは涼しくなりし昔猛暑の日々にふとなつかしむ猛暑日の今日も気温の更新に地球はいつか燃え尽きるのかテレビにて危険な暑さを上廻り今日は災害級の暑さと戦後より八十年の思い深し玉音放送わからず聞きたいし

関根和美

川島恂二先生

・埴

先生の医院閉じられ七代の医家のおわりを見るさびしさよ通いつめし十五年を長きとも短きともいえずび深かり歴傳に灯る足跡息づきにはのぐらき館内師とともにゆく開国派家老の鷹見泉石の史料の詳細・絵図の色彩文学館上のレストラン唐草もコロナ禍に閉ず復活はなきか
あちこちに大谷石なる歳の建ち篆刻にギョラリカフエにと活かす商家なる永井路子の旧宅の上がり框に見る祖母のかげ

高尾恭子

紫陽花ロード

・大

年波の息にあわせてめぐりあう六甲ブルーに染まる紫陽花たいそうな登りならねどストックを頼みに湿った天地を踏む虹色の紫陽花ロードをうつむいて行く人おおきな背をさらす
廃屋の鉄条網に絡みつく定家葛の香りにまどう
別荘のにぎわい消えて風立ちぬ少女のように灯るドクダミ
八重葎かき分け辿る六甲の眼下に鎮魂の海しずかなりフルートの序奏のことく七夕の今朝を初蟬おすおすと鳴く

高津砂千子

ゴーヤ

・埴

虫喰いのあらわなカシの枝ゆれて七月のあさ風のあるらしニュースにて危険な暑さと告げてくる朝あさ同じ言葉をきくも熱中症警戒アラートにも馴れて心とこの窓を開けつつくるくるとゼンマイのごとき蔓伸ばしゴーヤは育つ西の窓辺に五つ六つ黄の花つけて伸びてゆくゴーヤいとしも活力とせん日よけにと植えしゴーヤが窓おおい伸びてゆくなり文月のあさプロ野球聞きつつ針を運びゆく雑巾一枚暑き夕べを

滝田靖子

「星の時間」

・新

「星の時間」読みあふわれらを苦笑ひしながらどこかで見てるんだらう久々に通して読みし「星の時間」何だよ淋しい少女ぢやないか
本当の姿をわたしには見せぬまま逝つてしまひし小松智子の馬鹿情けなく思つてゐただらう辛辣な批判にくちけてしまひしわたしを今ここに居たらこんなの駄目だつて言ふかなもう一度言はれてみたいな今にしてわかることあり今にしてわかつてお世むかたないことあり
永遠に理解し得ないいち人は永遠にもう会へないひとり

田土成彦

木漏れ日

・宙

ボリ袋クラゲのやうに漂ひて暮れゆく天井川の水面は
道ばたで組み立てらるる月鉾の整ふ細目たしかな木組み
七月七日外気温三七度C外には出ずにエアコンの守り
五五歳でままかりし母自らの余命をわれにくれた気がする
妾と乱 役との違ひ書き分けて歴史は常に勝者が綴る
歳をとつただけ今年はエアコンの設定温度一度下げたり
木漏れ日の風にはあらず通りがけ不意に室外機の熱風あぶる

田土才恵

鳥居

・宙

虹のあし畑の中より立ち上がり何処へかかる旅ゆく道の
梅雨空の暗さを返し桔梗咲く白と紫こもこもにして
植え替えし鉢に残れる球根の存在知らず桔梗の二色
幾つもの赤き鳥居の重なる奥に潜めるものに怯ゆる
吸い込まれひとり二人と消えてゆく赤い鳥居の稲荷の杜に
潜りゆくひとつひとつの鳥居経ていつしか掴む空なるものを
コンロンカその名に思い出だすもの驟雨のなかを駆け抜けし道

玉井綾子

夏

・羊

駐輪場広く空いている朝八時ガシャンと出勤する海の日を
上総一ノ宮や逗子が行き先の電車で短パン見えぬ海の日
日傘さす男性増えて沿道の昼顔の色淡くなりたり
黒板にチョークで描かれしレモネードふと炭酸の弾み始める
夏の夜のスーパ―に泣きやまぬベーママは目深に帽子被りて
折り紙に疲れる母は隅田川花火のテレビを心待ちにする
真下でも離れていても動画でもテレビで見ても花火は開く

中島央子

再びの夏

・森

沛然と降り来る雨の通り過ぎ寝込みて一年再びの夏
年古りて脳裏に折々顔を出すコロナ禍にて止めし水泳教室
抽出しの古きTシャツ色あせず筋力鍛へるしはあの頃
転た寝の覚めて眺むる曾孫のスマホの寝顔天下泰平
スキヤンダル多き報道職散らせる如き大谷翔平のホームラン
七月は夫の忌姑の忌仏壇の灯火を暫し見つめてゐたり
じわじわと陽が照りはじめ梅雨明けの近きか蝉も鳴きはじめたり

永田進一

戦後八十年

・山

蟬時雨学徒出陣十万人過ち悔いて戦後八十年
『はだしのゲン』人類の宝は平和なり国境を越え時空を超えて
原作者中沢啓治は主人公被爆地なれど娣にて助かる
護り抜く平和憲法戦死者の三百余万人の犠牲の上に
弾取りの少年たりし吾なれば敗戦の報も腦の記憶
小使いさんカラコンロンと鐘鳴らす記憶の中の小学校に
高らかにラバウル軍歌を歌いつつ弟と歩いた田圃道

永塚節子

朝顔

・銀

赤に白淡いブルーと咲きそろう行灯仕立ての朝顔はなやぐ
あさがおをおこよなく愛でにし父なれば行灯仕立てを仏前に置く
行灯のめぐりを囲みとりどりに咲けるあさがお父よ起きませ
朝早くあさがお咲きしと起されしかの夏の日の父の声する
一日の花にしあればあさがおのうすき花びら時にさみしも
体温を越える暑さの続く日日立秋という言葉は死語に
年々に上昇しゆくこの気温来夏はいかにと今から憂う

仲西 正子 命

・沖

唱和してまたびたり止む蟬のこえトネリコの木に朝の日の差す
水瓶の小さき睡蓮花つぼみひとつなれども待つことのあり
睡蓮もメダカも命を継ぎて来し照る日曇る日この瓶に
眠れてか連日連夜テロップに悪石島の震度映れり
対馬丸の児らの眠れる海原に悪石島に揺れるなよ地震
あの戦しらぬけれども身めぐりの悲しき面がまた浮かびたつ
語り部の声は代われど戦地獄なべて変わらずウクライナでも

中村 博子

達成す

・漣

泉大津ワシントンホテルにリッチなる和食ランチの後の「夢洲」
老いの身に目標二つ達成す「全国大会」「大阪万博」
見上げたる大屋根リングの高さかな行き交う人ら小さく動く
孫勤務の会社関わる西工区大屋根リングや海観つつ歩く
和宏の「現代秀歌」の百年後に残るそのひとり俊万智かな
三食を完食しては横になり時にパソコンへ思い打ちこむ
大観の「無我」を観んとぞはるばると友は長野へ土産の「りんご小怪」

西堤 啓子

猫の恩返し

・天

公園のみどりを抜けて透明な傘さすひとの都会をただよう
テールランプもかすむ土砂降りフロントを打つ雨音に君遠ざかる
トンネルを抜ければ雨のあがる空 こころも肩もストレッチ要す
デパートのフロア量販店に占められて 雷鳥生息域狭めたたずむ
寄りそってぬくもり伝え去ってゆく ボディタッチは猫の恩返し
ひとつずつ思い出カブセル取り出してやさしい君を手に確かめた
クスノキの葉末にかかる有明の月の涼しさ酷暑の日々に

浜谷 久子

草の名

・地

失せ物も行き違いもほどほどに迎える夕暮れ少しく穏やか
降らぬ梅雨過ぎて畑土乾きゆく今を太れと胡瓜に水を
夏ことに変わる草の名こんもりと背比べする休耕田を
トマト似もナス似も生える畑の草日照りをものともせず真直ぐ
吹きつける熱波西日の台所塵はそよとも動かず灼ける
子や孫を育てる役割終えてよりやおら出でくる身の不調など
早朝の草刈り鎌のさくさくと小さな音を明日につなげる

檜垣 美保子

蟬声

・晶

かたわらに弟ありき遠き夏割り箸いっぽん川に落としぬ
魚断のたぎつ瀬の音せみの声たえまなくあり貢めたつること
たわむれに水面に砂をこぼす人しずかな背中風のなき午後
奔放に伸びし梢をととのえてながむればかすかに風鈴の音
精神の夏をうたいしうたびとを朝の胡瓜の花に立たしむ
みぞおちと背中の中のいたみ鈍ければ網戸を打ちて夜の蟬鳴く
美容師にくびすじ剃られわが肌の暗き手触り夜に確かむ

福田 庸子

鷹

・今

色深き五弁の桔梗花びらに灯る雫や朝涼しき
いつの間に育ちしものぞ庭隅を彩りゆけり椿赤き実
歟にあたる笹根は固く伝はれり地中に伸ばす今年の生は
羽の反りわづかに示す高圧の送電線上ゆるりと鷹は
海水温上がりしままに狂ひゆく地球の声は人に聞こえず
鳥も虫も生涯初の猛暑なり生き延びて欲し令和七年
食糧自給率上がらぬままに來たる世は山野の草を競ひて食むか

藤田 美智子

シナリオ

・新

保護色といふ生き方を選ばざるヤマトタマムシ光を返す

この先の人生にドラマはあるものか今宵組曲イベリアを聴く
窓に熱気の貼りつきたるまま夜となるぼんやり映る亡き人の影
関はりを絶ちてゐたるに寂しさの不意に湧ききぬ逝きて一年
嘘のなかにほんたうも混じりあるべしと思ひつつ少女の話聞きある
言ひかけてまた言ひかけてを繰り返す少女のなかに積もる言の葉
遅れるを繰り返してやがては魔界困難とすでに描かれてゐるシナリオは

藤 森 巳 行

蟻・ホタル

・銀

あの枝は切つてしまつたほうがいい植木職人花見の会話
生きてきた跡形もなく消えてゆく今世の終はりはそれでいいのだ
国民に中流意識が高かつた昭和の時代今は昔か

行つてきます明るく大きな孫の声期末テストは終はつたらしい
午前〇時ピッタリ起きてトイレに行く今日は良きことありそな予感
草甍り見てゐた子らが我に言ふ蟻のおうちが壊されちやつたあーあ
畔を行く前後左右を灯したる我が胸中のホタル幻

本 元 由 美 子

瓶コーラ

・岡

瓶コーラをノスタルジックに想ふときあの苦しみも泡に消えしか
わが庭の枯れゆく木々のトリアージ炎熱地獄の辛き選別
庭隅の蟬穴の道かよへどもこの夏その声聞かざりけるを
汝は家の太陽為れと君の言ふ吾が母に成りし明るむ部屋に
「ほお法華経」「特許許可局」鳥の声の木魂しきりの葉月の山映

山際に入道雲の湧き上がり津山盆地の夏盛りなり
歌会に通ふ津山の夏空ゆひとすちの風歴史をいざなふ

牧 雄 彦

夕ぐれのみち

・大

堰に立つ川鶴は動かず岸に咲く山法師の花見つめてゐたり
手押し車にチワワを乗せてゆく老いのそびらを夕日が静かに照らす
紫陽花のやや枯れたるがなほ色を残してゆふべの日を浴びてゐる
高みよりとほくに見ゆるタワーマンション上層階にいまだ日が差す
夕ぐれに「お早うございます」と言ふ 姫^{きみ}すれ違ひつとお辞儀をすなり
認知症らしきおうなはにこやかに門扉を押して家に入らむとす
大声で娘がおうなを叱りたり何やら哀し夕ぐれのみち

松 本 多 摩 子

短 冊

・桜

短冊に書くこと聞かれ涼しさと暑さを冷ます雨がほしいと
広大な桂キャンパス丘に建つ孫は五年目ここで学ぶか
県都より少し離れし田舎町選挙カーの声聞こえてこない
迷いなくエアコン付けて身を守る電気料金恐れていても
頼られて人手足りぬと請われれば行けばなんとか一日勤まる
八十を過ぎてても役立つ喜びよ一日勤まる子らの見守り
ブロックに囲まれる家に五十年地籍調査は難無く終る

三 浦 好 博

乗るまいぞ

・鮎

ファーストもセカンドもない人間ぞ排外主義にあるいは我も
受け入れて人手不足を助けられ何故今外人排斥なるぞ
「わたくしが変はらねばならぬ権利擁護マイノリティーにさせてはならぬ」
危機を作り排外主義に向かはせるカルトの手法には乗るまいぞ
低次元な排外主義が幅効かすホロコーストの初めもヘイト
この次は「クルド人らが毒かれた」ヘイトよ近づく大災害に
外人の犯罪言ふなら七十年間二十一万五千件米軍兵士のそれ

三 木 まり

瑠璃

・昂

路地裏の緑陰ふかく薄曇り梅雨明けの風吹き抜けてゆく
父が逝き母は一人に十畳の部屋は夕べに昏く沈む

十畳の部屋に寝ついた母ひとり呼べばいつでもここに来るよ
寝たきりの十畳の部屋 天井を見つめる母の梅雨が明ける
荒れ庭の夏草高く伸びてゆき草蔭くらく苦の花咲く
ちゅるりらと鳴く鳥は何 名を知らぬままにその歌たのしむ夕暮れ
坂道の向こうの海が瑠璃色に光ればもうすぐ夏休み来る

宮 本 靖 彦

空梅雨炎暑

・凌

梅雨月に雨なく過ぎし二十日経て今朝の小雨に庭木息衝く
空梅雨の炎天つづき下旬入りどか減り水槽残る水も尽く
真夏陽の降る今朝なれどよき政治願ひて希望の一票投ず
ギラギラと二度目の夏の幕開けだ四季なきインドをたどる日本
紅阜に囲まれてゐし老宅も人逝き樹なき更地と化しぬ
四名中三名逝きし古写真壁を飾りて滝音涼し

我が街も最暑地として二度テレビに。中学野球初大会地・豊中

三 好 聖 三

おもり

・伊

紙くずを丸めて投げるおおかたは的を外して床の花園
死に近き牛を重機で押してゆく温き牛舎へ悲傷の淵へ
味噌汁に入れて味わう磯物と精進蟹の出汁のうまさ
ぼら漁といるか漁とがこの村の支えであつたある時まで
あの人の明朗性が苦手でねてきれば距離をおいておきたい
書くことはおもりを降ろすこと沈黙にふれるということ
「ちゃらんぼらん」の教師がわたしの支えであつた ずっと

御代田 澄江

正座の幸

・茨

日の昇る前にと雑草刈り取りて水撒くひと汗かきて清しも
仏前に朝の挨拶一刻なれどまだ膝折れる正座のできる

蟬鳴かぬ蟬も熱中症なりや「鳴きたくないんだつて」笑ひ合ふ食卓
味噌汁にも水を入れて冷製に納豆は200回混ぜ卵を割りて
手製ドクダミ茶ヤカンに一杯一時間煎じ毎日飲みて心身整ふ
「左、おじいさんあり」同乗の子の注意 坂登り来る翁の見ゆる
ナガシマと言へば呼び捨てにしないでと小四敬愛の人背番号3永久欠番

もとむらしげと

トランプ時代

・そ

関税を美しいという大統領自国ファーストは孤絶の始まり
ただ一人を諫める者のなき事実プレジデントの意のままの国
権力に阿諛する者が幾人もホワイトハウスに棲みついて居る
ものの価値市場が決めてゆくものを売れぬ車を他国のせいに
狭き国に燃費少ない自動車をつくりて売れよ単純なこと
我ら棲む地球の未来も他国なる民の幸せも彼は思はず
人の名を冠し時代と括らるる妄言の世に生きているなり

桃 原 佳 子

決まらず

・沖

植えられしばかりの苗の先端をさわりゆくのか七月の風
分蘖のすすみし圃へと降り立つは数の増したる小鶯並麻鷺
発達障害の孫は理髪へ今日行くか明日か決まらず空を見上ぐる
おはぐろとんぼ昨日と同じ庭を飛ぶとんぼ道あるかコスモス咲く
リハビリを受けつつ眺める窓の外夏の庭木に白花多し
夕闇が徐々に猛暑をなだめつつそろりそろりと暗くなりゆく
家計簿の余白に記す出来事は私が生きてる証と思う

山下雅子

揺蕩う

・習

大雨と猛暑のメリハリ梅雨という人は器用に言葉を編みぬ
つゆ明けの空すっきりと白雲の揺蕩うしはしわれも揺蕩う
危険なる猛暑の予報は西方より孫と娘の広島旅行は
カムチャツカの地震のみやげか津波さわき島国日本なればの危うさ
思わざるリチウム電池の発火ありと電子辞書をまずは机上に
孫曾孫に流行るりんご病昭和には聞かぬ愛しき病名なり
わずらわしきマスクに我慢の早四年我慢我慢のいつまで続く

山野幸司

青

・沖

青空の青の溶け落つ夏の陽をすべらして行くウォーター滑り台
繰り返しさらは落ち来る水の上ウォーター滑り台夏を切り裂く
水の中滑り台行く一時を子どもと世界泳いでいたり
子どもらの中に混じれる一時を境界のなき水にただよう
子どもらの間を抜ける夏の陽もプールの背に我も染まれり
しぶき上げ泳ぐ子どもらオートセイ炎天敗けぬ両手を伸ばす
水の中進む我が内湧き出する想いの青大きなプール

山本

孟

中空に住む

・大

屋根はなく庭なくベランダにアロエ伸ぶ珈琲を飲み中空に住む
夏休み盆の休みも籠り居て今日も孤独が肩によりそふ
一人居の忙しき日もあり雑用を熟す立居に腰を痛めたり
目覚めしていつもの静かな朝になる補聴器つけば蟬しぐれの中
わが体動く限りは歌友待つ会へ杖突き何としても行く
いつまでも生きるわれの意志ならずただ腹一杯の食ありがたし
ヘルパーの手料理われの腹満たす空の鍋出すガザの心痛まし

養学登志子

けわい

・凌

誰かいる目覚めのときの瞬のさやとすぎゆくけわいとは何
「起きよ」という声なきけわいの往き来して急ぐ用の何かありしか
見ぬふりをしてすぎ往きは父かとも気付かぬふりするけわいの父よ
「むかしむかしあるところ」なる幻は今もそらりとけわいをよこす
醒めて見るあたりに変わったことはなし昨夜洗った一合の米
机上には読めぬ本を積み重ねクリップ止めのメモ紙雑然
鉛筆もて思いのままの書けぬとき体中どこかばりばり痒き

横田敏子

猛暑の日々

・福

暑き日をいすこに潜みておりしやら葉月の朝の鶯の声
朝仕事終えて広ぐる日記帳昨日のことをもう忘れおり
花や木は何にて季節を感じする熱風の中みそ萩揺るる
さやさやとそよ木洩れ日今は無く光の刃となりて地を射る
猛暑日に届きし封書温かし あなたの歌がバイクに揺られ
取り込みし洗濯物を抱きしめてエアコン疲れの身体温む
突然に豪雨は来たり 焼け焦げし天と地全て生き返るべし

磯田ひさ子

さやさやと

・森

隅田川の上に咲きたる大花火しだれてやがてさやさやと消ゆ
三回忌すぎて独りで見る花火哀れにあらず哀れにあらず
懸命といふ時期ありき小さくも光る会社と夫と共に
張り合ひて生きて来たるかさびしくはないがつまらぬ独りの暮らし
萩 ミモザ 草ほとときすわが植ゑし草木としどし暴れ易くて
水遣りもほどほどの庭あさがほもすすきも身の丈に合ひたる暮らし
縛らるることなき豪奢な身となりぬたどりつきたる幸ひなるか

市原やよひ

山法師

・萬

夫恋し震える程に夫恋しなかな暮れぬ五月の宵に

戸を閉ざせどなお寂しさまとい来る五月の宵の一人居の闇

箱根の山も今山法師咲く頃か街路樹白き花付け始む

山法師の名を覚えしは遠き日の大涌谷の坂登り行く時

あの白き花に見ゆるは夢なりとさりげなく言つた一歩先にて

電柱の濃き影道をトウセンボウ今日もキラキラ始まって行く

年寄りはいつまで飽もればいいのかな百日紅大き花房揺らす

梅本武義

長生き

・羊

軒下の蜂の巣駆除の緊張も何か楽しき梅雨明けの空

菓子ジュースあれば孫らいつも来る「長生きしてね」と時偶に言う

子を連れて八十八ヶ寺巡りたる名残の瓶なり五円貨残る

菜園に水路の高さ利用して老軀半日水遊びする

二匹駆除して七ヶ月新参の猪今か今かの思い

唐鍬に竹の根切りて芋掘れば侵略撃退したる満足

夏空に二機が轟音残し去るなめられてたまるかと行きしか

大浪美雪

水無月

・森

香料を宛所に無しと戻されぬあ本当に逝きしか 鳴呼

路地の先を大いなる月の寒きをり右端欠けたる月赤黒き

朝まだき孵化失敗のかまきりや果落ちし雛に拱くしかなく

古き葉を落とし尽くして楠の木のやはき新芽は風を通しぬ

校正の終るのを待つらつきようと梅、李も呼んでる楽し水無月

夕暮れの長き夏至の日嬉しきかカラスも鳴きを張りある声に

空梅雨か小雨土砂降り青空と変はる一日虹は未だ見ず

奥田陽子

幼き声

・羊

神様が預かってくれているだけだよ 幼のことは胸に満ちくる

また会える会えるからねと言いながら合ませるその小さき手なり

ひと日ごとに供え物変えに来る子かな昨日ミニカー今日は板貝

おじいちゃんからお返事来たよ 仏壇の花びら散るに幼き声が

午前三時はげしき雨の音をなししはらくの後小さくなりぬ

うこんの花道影にちかく供えたり蓮にも似てひらける花を

喪いて還る事なきかなしみにわが名を呼べるやわらかき声

神田鈴子

「国宝」

・大

猛暑とふ酷暑の上ゆく日が続き朝より強き光が肌刺す

体温を超える猛暑を防ぐすべあらず街より人のかけ消ゆ

かねてより評判高き「国宝」なり上映進めば金縛りとなる

あてやかな歌舞伎の世界に言葉なく一つひとつの所作に見惚れぬ

指の先までもうるはし「白鷺の舞」に心を奪はれるなり

三時間余を静まり返る映画館余韻にひたり立つ人はなし

幼き日祖母に連れられ観し歌舞伎 蘇りくる映画「国宝」

上林節江

さよならじゃない

・湾

みちのくの蔵王み山の火のごとく佐久間屋の喝は「励め」と

あの会いが転機なりきな噴くようにわれに始まる短歌への熱

「わが命がけの短歌」と吼えし師のあの噴火には遠しわが歌

「おしゃべりも遅刻もならぬ」と轟かせ育ててくれたとかみしめる今

喪められし記憶なけれと浮かぶ師は笑む顔ばかりさよならじゃない

「自分では何もできない人だからお腹空かしてないかしら」と夫人

晴れわたる泉ヶ岳よふもとなる白寿のお方を護らせ給え

菊地栄子

真夏日

・海

簪を束ねたような栃の花里の空気を引き締めている
藤の花の登り詰めたる杉林音もあらくなく昼をたけゆく
わらび取りとり放題のサーブスに姉は背に負い両手にも持つ
振り返り時計を見るも億劫なり今日の暑さは真夏日を越ゆ
真っ白な絮毛も即座に吸い取りて四畳半なる掃除を済ます
梅の実の漬け時甥が聞いてくる今は青梅黄に染まる頃
自然暑の蔓が落とししむかごなり雨にうるおいて命吹き出す

河野繁子

のりうつき

・雁

所有する核をちらほら覗かせて戦争やめると言わぬブーチン
カムチャツカの地震の津波来るといふ逃げる逃げるとテレビは叫ぶ
ひもじさとともに出でくる天下茶屋その生き魂は花野に遊ぶ
戦争はやめとて叫ぶ山峡にのりうつき咲き危険な暑さ
教わりしりのりうつきなり若き頃全国大会に参加のあの日
ひたいにはメガネが二つまた探すこゝなはずではなかった晩節
バリバリと急激な雨杖つきてあわてて行けど干し梅ぬらす

近藤栄昭

生活調査

・虹

「昔はなーカウスがいたよ」カワウソに気づく間がある生活調査
溢れる日あぶくま高原谷の奥焼酎出されて調査長引く
調査といふ個人情報引き出すと一人の一世一章に溢れる
梅の木が庭にある家葉ましい木の実乏しいあぶくま高原
酒だされ話の接ぎ穂に頑張りを聞いて食物調査続ける
長男の他は出されて作男女は子守りに昭和のはじめは
沈黙の眉に閉じいる嫁の口今話さない唇がある

近藤芳仙

吉野五月(一)

・信

西行の運びし出家あくがれはあくがれとして未だ残れり
昔より桜の木木を育める吉野の温し信濃より来て
すつぽりと吉野の木木におほはれし西行庵とふこの目に見たし
あくがれし奈良の奥山ここよりは修験の道の熊野へつづく
「花見にと群れつづ人の」西行の詠みし桜は自然賛歌ぞ
花の下に死なんと思ふ歌残し西行は死す満月の夜に
何に迷ひ求めて何を得し道か西行の歌けふは味はふ

久我田鶴子

雑歌

・羊

「名前のない馬」が導くあの頃へソニーのクーガわが傍らに
やまひにて子宮を除きやまひうたがひすいざうたんうこつそり除き
もうなにを捨てたらいいと立ちてるき袋のやうな人体ひとつ
八月へきみのまたいだときなるを洋上はるか発眼のあり
今年また燕が巣立つ千代田区は神田錦町ひとときの騒
いづくより巢材はこびし飛びかふは出入り自由に皇居にも行く
裸眼にて今とらへうる星ひとつ未明の空にはだかのまなこ

